

## 松文産業(株)旧女子寮「精華寮」の建築 (2) 宿舎棟の復元

吉田 純一\*, 多米 淑人\*

### The Buildings of the Dormitory called `Seika Ryo` in the Matsubun Industry Co., Ltd. (2) The Old State of the Buildings for Lodgings

Yoshida JUNICHI and Tame YOSHIHITO

This article is a survey about the construction of the girls dormitory which Matsubun industry Co., Ltd. owns. This report considers the old state of three lodgings. Both of them had the corridor in the north side and 6 dormitory rooms in the south side, of the first floor, and the second floor together.

Keywords: Matsubun Industry Co.,Ltd., dormitory, Seika Ryo , old state

#### 1. はじめに

前稿では、「精華寮」を構成している3棟の宿舎棟の現況を報告した。本稿はそれに引き続き、これらの宿舎棟の旧状について痕跡調査、および松文産業(株)に保管されている古写真をもとに復元考察する。

なお、本稿内の古写真の番号は後掲の「(4) 古写真にみる寮内の生活風景」に示す古写真一覧の番号を用いている。

#### 2. 宿泊棟の復元

3棟の宿舎棟は、いずれの棟も以前は1、2階ともに北側に1間幅の廊下を通し、その廊下に沿って南側に寮室が並ぶ平面形式をとっていた。しかし、上述したように、3棟ともに1階は廊下や寮室板がすべて取り払われ、寮室の面影がうかがえるのは3棟ともに2階部分だけである。その中でも当時の寮室の状態をほぼそのまま留めているのは三号棟2階だけで、一号棟と二号棟の2階は大幅に改修されており、現状からもとの寮室がどのような状態であったのかはわからない状態である。

唯一旧状を留めている三号棟2階の状況ならびに一号棟、二号棟、三号棟において1階上方にみられる2階床梁や南面の側柱などに残る痕跡を頼りにしてこれら3棟の往時の状態を推察することができる。後掲の図はこうした検討によって得られた一号棟、二号棟、三号棟の1階部分の復元平面図である。以下、復元の考察を説明する。

---

\* 建築学科

## 2-1. 平面構成の基本型

一号棟、二号棟、三号棟のいずれにおいても1階の上方にみられる2階床を支える梁組の構成は同じである。その構成は、まず短手の梁間方向に4間持ち放しの大梁を3間間隔に渡し、これらの大梁に桁行方向の小梁を1間間隔に通している。すなわち、梁間方向の大梁は9本架け渡され、桁行方向の小梁は長手方向に3列に通っている。

これら大梁や小梁の下端には柱が刺さっていたホゾ穴や土壁の付着痕が規則的に残っていて、すべての大梁の下端には1間間隔に柱のホゾ穴がある。また、長手方向の桁行に関しては、北側1列目の小梁下端にやはり1間あるい半間間隔に柱のホゾ穴が並んでいる。したがって、以前は、大梁が架かる列と北側から1列目の小梁筋に1間間隔に柱がたっていたこと、そしてこれらの柱筋を基本として廊下や部屋割がなされていたことがわかる。寮室の旧状を留めている三号棟2階の構成も北側に1間幅の廊下を通し、それに沿って南側に床や押し入れを含めて3間×3間を単位とする寮室群を配されていて、この基本構成は一号棟、二号棟、三号棟いずれにおいても共通に踏襲されていることがわかる。

つまり、一号棟と二号棟の1、2階、および三号棟の1階においても、三号棟2階と同じような北側1間を廊下とし、廊下に沿って南側に3間四方を基準とする寮室を並べる平面構成を想定できるのである。



写真 01 階床梁に残る柱ホゾ穴  
と土壁の付着痕



写真 02 柱に残る貫穴

## 2-2. 寮室部の復元

次に、方3間が基準である寮室部の復元を試みる。方3間の室境に相当する2列の大梁とその間に通る北側一列目の小梁の下端の柱ホゾ穴の痕跡から、まず寮室部の周囲は原則として1間間隔に柱がたっていたことがわかる。そして桁行に通る3列の小梁にはいずれも大梁列から西へ半間入った位置に柱ホゾ穴が1か所ずつみられることから、寮室の境に奥行き半間のスペースがついていたこともわかる。したがって、寮室部の基準単位である方3間は梁間3間に桁行2間半のスペースと室境の梁間方向につく3間×0.5間のスペースに分けられるのである。このような構成は一号棟、二号棟、三号棟の1、2階のいずれの寮室にも共通している。そして、旧状を留める三号棟2階の寮室に照らし合わせると、3間×2.5間のスペースは15畳大の部屋であり、室境の3

間×0.5 間のスペースには押入れや戸棚、あるいは床が設けられている。そして南面は中ほどに 1 間幅の窓が 2 か所あり、押入れや床脇の半間が壁で、廊下境の 3 間は東寄りの 1 間が中央に柱がたつ壁になり、中央の 1 間が腰付きの窓、西端の 1 間が引き違い建具を入れた出入り口になっている。

一号棟、二号棟、三号棟の 1 階部分については、旧柱のほとんどが撤去され、一号棟、二号棟の 2 階も大幅な改修によって旧柱などはすべて合板で覆い隠されているために、痕跡などからはこれらの寮室の柱間や間仕切りがどのようなものであったのかは確認できない。しかし、これらの寮室部もおそらく三号棟の寮室と同じような形式、構成をもっていたものと思われる。



写真 03 階床梁に残る柱ホゾ穴と  
土壁の付着痕



写真 04 柱に残る土壁の付着跡

### 2 - 3. 各部屋の床と押入れ

三号棟 2 階の寮室をみると、どの部屋も床と 3 つの押入れがついている。床は必ず南寄りの 1 間すなわち窓側にあり、奥行が 1 尺 5 寸程度の浅床である。これは隣り合う部屋同士で半間を 2 つ割にして設けているためである。一方、押入れはいずれも幅 1 間、奥行半間で、引き違いの板戸が残っている例もある。押入れがつく位置は部屋によって異なっているが、東西両端の部屋はそれぞれ東面と西面に 3 つ並んであり、それらのひとつ内側の部屋も東西を反転させれば同じ位置についている。つまり、6 室を東西 3 室ずつに分け、中央で折返せば、床と押入れの位置は規則的に配置されていることがわかる。

一号棟、二号棟、三号棟の 1 階南側の柱列をみると、1 間幅の窓がつく柱間 2 つと中央に柱をたてる半間幅の柱間 2 つが規則的に並んでいる。このうち、半間幅の壁付きの柱間の中には中央に付柱がみられるものがある。これは三号棟 2 階の寮室にみられたものと同じような奥行が 1 尺 5 寸程度の浅床がついていた跡で、それぞれの棟で 3 か所みられ、しかも 2 寮室分の 6 間間隔についている。したがって、一号棟、二号棟、三号棟の 1 階寮室でも三号棟 2 階と同じように隣室同士で半間を 2 つ割にした奥行の浅い床が南側の窓際についていたことがわかる。押入れについては確認できないが、この床の付き方からみて押入れの付き方も同様であったと推察することができよう。





写真 05 柱に残る浅床の痕跡



写真 06 三号棟 2 階の床と押入れ

## 2 - 4. 1 階廊下の天井や床高

一号棟、二号棟、三号棟の東寄りの一面には元の廊下部分の棹縁天井が一部残っていることから各棟の1階廊下はそれぞれの2階にみられる棹縁天井であったこともわかる。また、一号棟の東寄りにみられる現事務室部分は古い柱が1間間隔に立ち、板床も旧状を踏襲しているとみてよい。さらに一号棟や三号棟では元の土台に根太彫の痕跡がみられる。これを計測したところ、現在のコンクリート床面から根太彫りの上端までが1尺3寸余（39cm）であり、旧板床の高さは1尺4、5寸程度であったことになる。この高さは現事務室の床高にもほぼ合致している。



写真 07 棹縁天井



写真 08 土台に残る根太彫

## 3. 古写真にみる宿舍棟

松文産業（株）には巻末に掲げたように46枚の古写真が保管されている。撮影された年代を特定できるものはほとんどないが、人物の服装などからみてその多くは大正期から昭和30～40年ころまでのものと考えられる。ここでは宿舍棟に関するものを取り上げ、往時の宿舍棟の建築や施設を具体的に探ってみたい。

### ①一号棟外観（古写真2）

後述するように現在の入母屋造の玄関棟はなく、当初の玄関は一号棟の東端に石造の玄関ポーチが張り出していた



古写真 2 一号棟外観

こと、そして一号棟は講堂棟まで延びていたことがわかる。一号棟の外観は外壁の下見板張や窓の形式、その前につく手すりなどは現状も変わらない。

## ②廊下（古写真 3）

3 棟の宿舎棟の 1、2 階に共通してみられる北側廊下の様子である。桁行 27 間分を通した直線の長い廊下で、棹縁天井や床板、さらに寮室の出入り口の様子もうかがうことができる。廊下の奥に部屋があるようにみえる。廊下の先に部屋がつくのは一号棟 2 階だけであり、この奥の部屋は「ブツマ」と思われる。そうなれば、この写真は一号棟の 2 階廊下を西から東に向かって撮ったものであり、1 階の 1～6 号室に続いて 2 階の東端を「七号室」とすることとも矛盾しない。



古写真 3 廊下

## ③寮室（古写真 4）

どの棟かは明らかでないが、窓から瓦屋根の建物がみえることから宿舎棟 2 階の寮室であることは疑いない。窓際に奥行の浅い床、手前に板戸立ての押入れがあり、その上には天袋がつく。床は畳敷、天井は棹縁天井である。

この他、古写真 20・21 からも寮室の様子がうかがえる。窓際に奥行の浅い床があり、その壁は黒い色であったことがわかる。窓の外側に取り付く手すりは現在もみられる。



古写真 4 寮室

## ④便所（古写真 5・6）

一号棟と二号棟の中ほどから北側の中庭に別棟で張り出す下屋部分に設置されていた便所の写真である。おそらく反対側も同じような女性用の便所であったとみられる。当時としては最新の水洗便所であった。床は小さいタイル貼り、腰には大きめのタイルが貼られ、壁は漆喰であろう。ただし、2 枚の写真には床タイルの貼り方や扉の腰板の高さなどに違いがみられ、同一の便所ではないことがわかる。ちなみに、寮内の便所は当時すでに水洗便所であった。



古写真 5 便所(1)



古写真 6 便所(2)

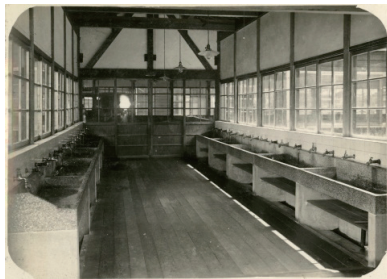


## ⑤洗面場（古写真7・8）

古写真7は、二号棟から講堂棟に通じる渡り通路にあった洗面場である。渡り通路の規模が桁行5間、梁間2間であることは現状も同じであり、講堂棟境の筋違も同じであることから判断できる。ただし、両側に並んでいたコンクリート洗出しの手洗い台は残存していない。

古写真8も洗面場であるが、水槽はタイル張りになっている。古写真7の改修とも考えられるが、新装となれば、一号棟・二号棟より後につくられたと考えられる三号棟から講堂へ通じる通路にあったものとみることでもできよう。そうなれば、奥に続く廊下は三号棟1階の廊下ということになる。しかし、この通路には現在は棹縁天井がみられ、古写真8とは違っている。

なお、現在は二号棟や三号棟から講堂への通路には洗面・手洗の施設はみられず、一号棟では北への張り出す下屋の2階に設けられている。これらは古写真7・8にある洗面場が取り払われた後に代わって改修されたものと考えられる。



古写真7 洗面場(1)



古写真8 洗面場(2)

## ④洗濯場（古写真9・10）

2枚の写真は洗い場の様子や周囲の室内の様子から同じ洗濯場と思われる。中央の出入り口とその両側の2間の窓があることから間口は5間、奥行は少なくとも4間あったことがわかる。この洗濯場があった場所は確定できないが、背後に樹木や庭らしき風景がうかがえるところから、宿舍棟に挟まれた中庭にあったことが考えられる。



古写真9 洗濯場(1)



古写真10 洗濯場(2)

## 4. 結語

以上のように、現状では大幅に改修されている一号棟、二号棟、三号棟の1階の旧状を復元できる。次稿で述べるように、一号棟の東につく玄関部とその2階の広間部分を除けば、各棟の2

階もそれぞれ1階と同じ構成であったと考えられる。すなわち、宿舎棟の3棟は1、2階ともに、いずれも北側に1間幅の廊下を通し、それに沿って南側に3間四方を基準とする寮室部を6つとり、各寮室部は浅床と3つの押入れを備えた15畳大の部屋からなっていたことがわかる。

そして、古写真から一号棟、二号棟、三号棟のそれぞれ1、2階に6室ずつ設けられていた15畳大の寮室や北側に通る廊下、さらに便所や洗面場などの様子も具体的に知ることができる。

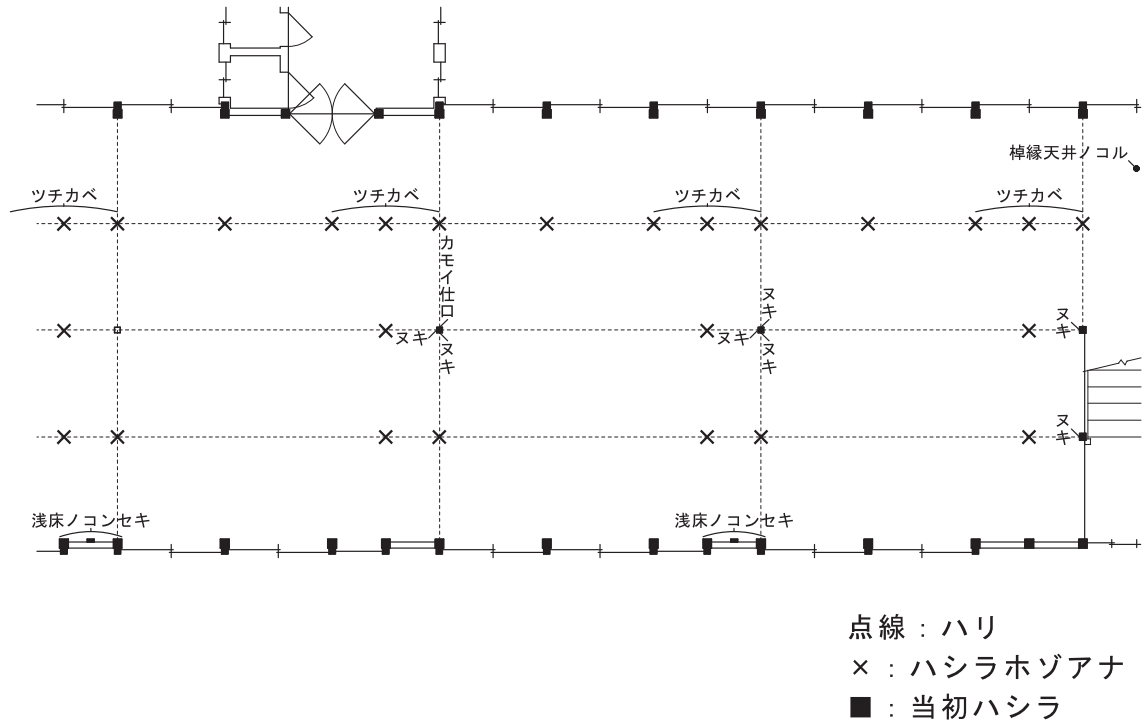


図1 一号棟寮室1階痕跡図(一部)

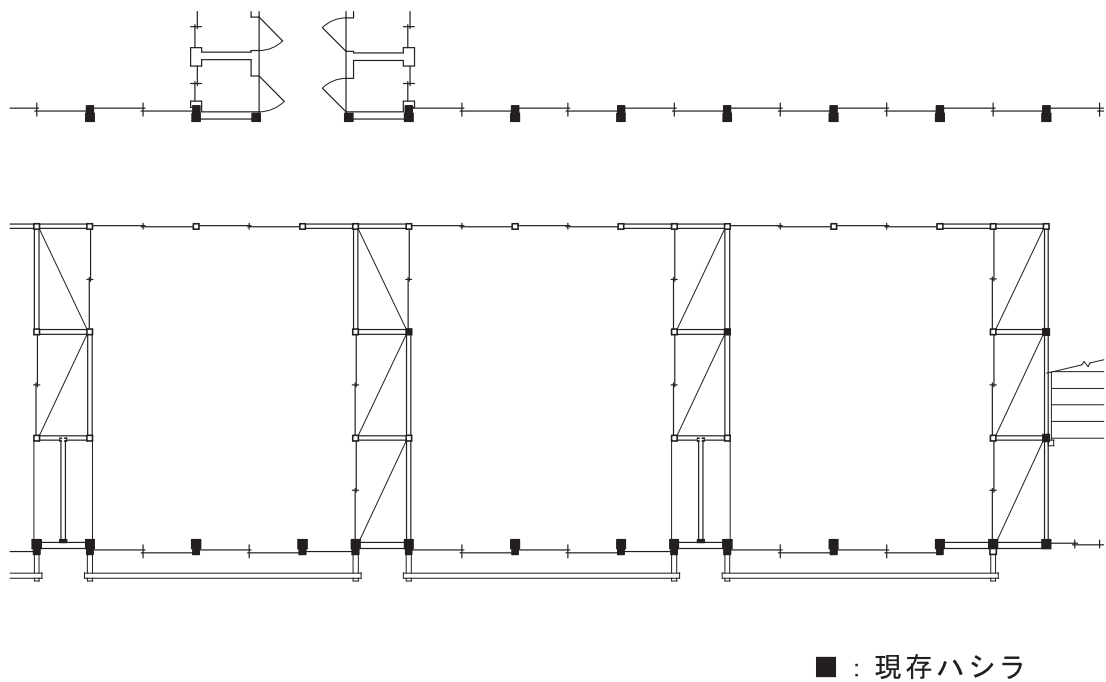


図2 一号棟寮室1階復元図(一部)

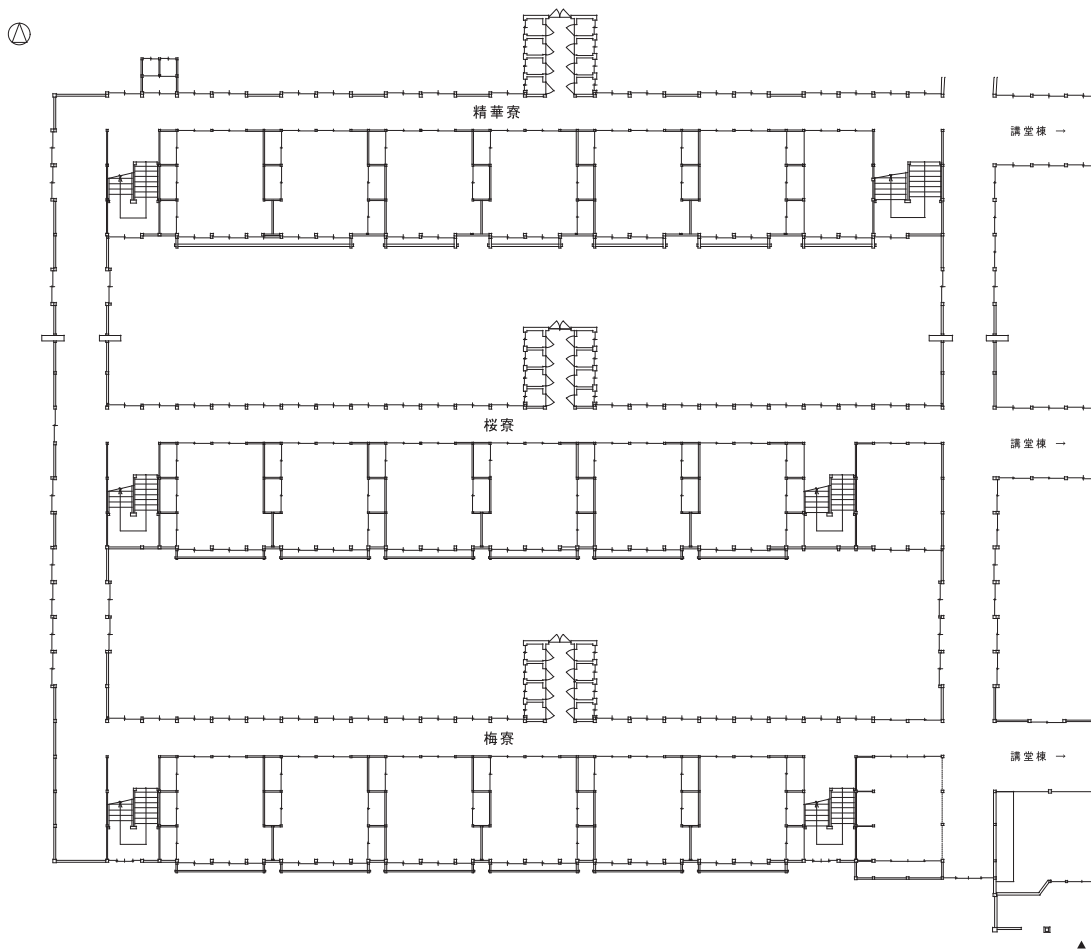


図 3 宿舎棟 1 階復元平面図 1/400

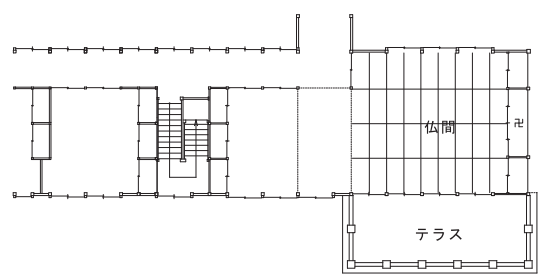


図 4 宿舎棟一号楼 2 階寮室および広間復元平面図 1/400

(平成 24 年 3 月 31 日受理)